

特集 抗 VEGF 薬の最新情報

序 論

門之園一明*

抗 VEGF 薬は眼科治療を大きく変えた。抗生物質の登場に等しいものがある。初めは、大学病院で行われるレベルの治療であったが、いまでは、眼科診療所でも行われ広く普及している。

抗 VEGF 薬の開発は継続して精力的に行われている。その目的は、より高い薬剤有効性すなわち浮腫の改善や新生血管の抑制を経た、視機能の改善にある。さらに、いかに投与間隔や回数を減らすかが、あたらしい抗 VEGF 薬開発の共通のゴールである。

近年、いくつかのあたらしい抗 VEGF 薬が登場してきているのは、みなさまよくご存じのことと思う。そこで、この数年のあたらしい薬剤の特徴をあらためて検証することは重要であり、本特集は、各種薬剤の特徴をわかりやすく解説することを目的に編集された。あたらしい抗 VEGF 薬の特徴の整理に役に立つと思う。

現在本邦で承認され、網膜疾患に対して使用できる抗 VEGF 薬としては、ラニズマブ(ルセンティス®)、アフリベルセプト(アイリニア®)、ブロールズマブ(ベオビュ®)、そして 2022 年 5 月に発売されたファリシマブ(バビースモ®)の 4 種類である。このなかでも、ブロールズマブおよびファリシマブは、高度なバイオ技術を用いたあた

らしい分子構造をもつ抗体薬であり、これまで以上の薬剤有効性が期待されている。

ブロールズマブは、VEGF 分子のすべての結合を疎外する抗体を持ち、強い薬理作用を持つことが特徴である。他方で、眼内炎症症状の出現が報告されている。最近市販が開始されたファリシマブはアンジオポエチン 2 に結合する抗体を有しており、滲出型加齢黄斑変性に対するより持続性のある薬理効果や、糖尿病黄斑浮腫の治療としての高い有効性が期待されている。昨年には、抗体薬の後発製品いわゆるジェネリックであるバイオシミラーが登場した。抗 VEGF 薬の医療経済に与える影響や患者負担を考慮すると、このような薬剤の使用も今後は組み入れていく必要がある。

さらに、患者の眼内に抗 VEGF 薬を入れた小さな器具を埋め込むという Port delivery system (PDS) の臨床試験も日本で開始されている。より長期間の薬剤安定性と有効性が期待される。埋め込み手術や再充填を行う必要があるため、特別な技術の習得が必要と考えられている。本号の表紙をぜひご覧ください。

抗体薬は、有効であるがとても高価でかつ、長期間の継続使用が前提であり、その使用には十分な知識や経験が必要であろう。本特集は、その分野のエキスパートにより簡潔に記載されており、先生方の抗 VEGF 薬の知識の整理に必ず役に立つと思います。

*Kazuaki KADONOSONO 横浜市立大学視覚再生外科